

解剖学1

(1) 人事の沿革

昭和55年4月、解剖学1講座は京都府立医科大学より赴任してきた教授：野条良彰，助教授：渡辺憲二の2名の構成で開講した。昭和56年4月には京都大学大学院理学博士課程を修了した青山裕彦が助手として，昭和57年4月には，大阪大学大学院理学修士課程を修了した玉巻伸章が2人目の助手として採用され教官4名の態勢が整った。昭和56年9月に解剖技官として鈴木 操が，昭和57年4月には解剖学1，2講座共通の事務官として仲井精一が採用された。昭和58年4月仲井精一が研究協力係に配置換えになりその後任の教室技官・事務官として山田（現浅本）弥生が採用された。以上の7名が解剖学1講座の創設期メンバーである。昭和61年5月，渡辺憲二（現姫路工業大学理学部教授）は岡崎の基礎生物學研究所助教授として転出，青山助手が講師に昇進，本学1期生の浅本 憲が助手として採用された。昭和63年4月，青山講師は助教授に昇進した。平成4年3月浅本弥生が離職し，免疫・寄生虫学講座より井上佳子が着任した。平成4年4月に2人目の解剖技官として皿澤正直が病院薬剤部より着任した。平成7年3月には青山助教授が高槻市のJT生命誌研究館に主任研究員として転出，同4月大阪大学基礎工学部大学院修士課程を修了した藤森一浩が助手として採用され，5月には玉巻助手が助教授に昇進した。平成8年10月，技官の井上佳子が生化学2講座へ移動し，事務補佐員として戸枝尚子が採用された。平成9年3月解剖技官の皿澤正直が離職し，病院材料部より鰐淵勝隆が着任した。平成11年3月，玉巻助教授は京都大学大学院医学研究科高次脳形態部門の助教授として転出し，同4月，浅本 憲が助教授に昇任した。同5月，助手として名古屋大学より飯野 哲が着任した。この他，技術補佐員として，平成3年に是常幾代が，その後任として平成7年－平成9年まで高氏留美子が採用された。

(2) 共同研究者

臨床系講座の大学院生や助手として，磯松（現木村）瑞穂（皮膚科），本多徳行（耳鼻科），柴森良之（耳鼻

科），姚 玉林（第1外科），平井玲子（眼科），上田敬（第2内科）が，本講座での研究により博士号を取得した。また半田裕二（脳神経外科：現手術部助教授）とも多くの共同研究を行っている。また学外からの研究生も多数受け入れており，そのうち竹内義享（元竹内整骨院院長）は平成9年3月医学博士の称号を受けた。さらに，中国医科大学からの留学生としてトン・シャオジェが1年間研究を行った。

(3) 講座の活動

本講座の教官や技官の活動は，教育・研究はもとより，学生諸君との交流（教育・研究はもとよりそれ以外での）にまで及ぶ幅広いものである。教育に関しては，発生学，組織学総論（実習を含む），人体解剖学実習，系統解剖（呼吸器，循環器，血液，免疫系，泌尿生殖器，内分泌，神経解剖など）を担当してきた。実習用遺体の確保に関しては，葬儀への参列，霊安室での受け取り，防腐処置，しらゆり会関連行事への参加を行っている（本誌「福井医科大学しらゆり会」の項も参照）。

研究面では，一貫して神経回路網の形態学的解析や，その形成機構の解明を，発生学的手法や分子生物学的手法も取り入れながら行ってきた。現在は，自律神経を中心とした末梢神経系での解析を中心に研究を進めている。

本講座の一つの大きな特徴は，午後5時以降に繰り広げられる学生諸君との交流会（学生諸君の参加しない交流会も多いが）であろう。昭和56年春，まず1期生の学生が数名，勉強会と称して図書集会室に出入りし始めた。午後5時になると当時の渡辺助教授が出してくる焼酎をみんなで飲み始めるのである。夏になると焼酎はビールへと，秋から冬には日本酒へと飲むものの種類は変わっていったが飲まない日は無いと言っていいくらい毎日続いた。やがて，学生の数名が教官の実験を手伝うようになった。その後も，出入りはあったものの，常に何名かの学生が図書集会室に集っている。平成12年3月現在では，5年次生1名，3年次生1名が居候学生となっており，彼らに関係するその他の学生も顔を覗かせている。交流会の方も，初期ほど毎日ではなくなったが，何かと理由を付けては開催している。今後とも，教育・研究はもとより学生諸君との交流を含めて，活発な活動が続ける講座でありたいと考えている。

（文責：浅本 憲）